

「わく」の意味分析

藤 森 秀 美

要 旨

本稿は「わく」の用例をコーパスで収集、分析した上で、意味を明らかにし、その関連性を示すことと、学習者の「わく」の適切な使用にかなげることを目的としたものである。「わく」は「沸く」、「湧く」、「涌く」の3つの漢字表記に加え、平仮名表記もなされる。本稿では、表記の違いによる意味の相違はないという立場をとり、分析を行った。

自動詞「わく」は、1語の多義語として扱う辞書もあれば、2語の同音異義語として扱う辞書もあり、学習者にとっては、必ずしも学びやすい項目ではない。本稿では「同音異義語寄りの多義語」であると捉え、15の意味に分けて分析した。また、15の別義間の関連性を明らかにした上で、多義構造を図で示した。このことにより、学習者は、「わく」の全体像をつかみやすくなると考えられる。自動詞「わく」は温度上昇による沸騰という意味と出現の意味が際立ち、それぞれから複数の意味が派生していることが、用例を分析することにより明らかとなった。派生を動機づけるのは、メタファーとメトニミーという比喩であることを確認した。本稿で「わく」を多義語としたのは、「沸騰」と「出現」の意味間に関連性が認められるからである。さらに、分析の結果明らかになった別義のコロケーションを詳細に示した。このことにより、学習者の「わく」を含む文の産出が容易になると考える。

キーワード

多義語、同音異義語、多義構造、メタファー、メトニミー、コロケーション

1. はじめに

自動詞「わく」(注1)は、日常広く用いられ、日本語教育における教材にも比較的初期の段階で提出される学習項目である。しかし、辞書では

「沸く」は温度上昇、「湧く・涌く」は出現の語義を載せ、別の見出しになっている場合や、一つの見出しにまとめられているものもあり、辞書によって扱いが統一されていない。また、複数の意味の選定基準、それらの関係について明らかにされていないため、学習者にとって学びやすい項目とは言えない現状である。そこで、本稿では、「わく」の現代語の用例をコーパスで収集し、分類した上で、複数の意味を記述した。また、それらの意味の相互関係を示した。さらに分析結果をもとに、それぞれの別義のコロケーションを示した。このことにより学生の「わく」を含む文の産出が容易になると考えられる。

本稿の4節では、まず、多義語（注2）の分析を行うが、多義語分析の課題とされる4つのうち、「何らかの程度の自立性を有する複数の意味の認定」、「複数の意味の相互関係の明示」を行う。複数の意味の関連性を考える際には、比喩が深く関わるが、それは、3節で述べる。

以下、本稿の構成について述べる。2節では、一般辞書と学習者向けの辞書をとりあげ、「わく」を多義語か、同音異義語かという点から考察し、辞書の語義について検討する。3節では、多義語分析の4つの課題を確認し、比喩の概念であるメタファー、メトニミー、シネクドキーについて述べる。4節では、コーパスで収集した用例を示し、「わく」の分析を行う。5節では、「わく」の15の別義間の関係を示す。6節では、「わく」のコロケーションを示す。7節では、本稿のまとめを述べる。

2. 辞書類の記述

本節では、一般辞書と学習者向けの辞書の記述から、「わく」は多義語なのか、2語の同音異義語なのかについて考察し、さらに、辞書の語義を検討する。

2. 1. 辞書類における多義語か、同音異義語かの扱いについて

『旺文社国語辞典 第十一版』では、「沸く」と「湧く・涌く」は別の見出しとして掲載されており、2語の扱いがなされている。『明鏡国語辞典

第二版』・『大辞林 第四版』・『大辞泉 第二版』でも、別の見出しとして掲載されているが、「沸く」の語義説明のあとに「湧く」と同語源」と記されている。しかし何を以て同語源としたのかは、明示されていない。2語の扱いをしているものの、多義語の可能性を示唆していると言える。一方『現代国語例解辞典 第二版』・『新明解国語辞典 第七版 特装青版』・『岩波 国語辞典 第8版』では、1つの見出しになっており、多義語の立場をとるが、「沸く」「湧く・涌く」の漢字表記の違いで、語義が載せられており、完全に多義語であるとは明言しがたい扱いである。『日本語基本動詞用法辞典』では、1つの見出しのもとにまとめられており、明確に1語の多義語であるという立場をとる。

このように、「わく」は「沸く」と「湧く・涌く」を①別の語、つまり2語であり、同音異義語であるという立場の辞書から、②別語であるとしながらも、「同語源」つまり、多義語の可能性を示唆する辞書、③多義語であるとする辞書、の3つの扱いが存在することがわかる。このことから、「わく」は「同音異義語寄りの多義語」(注3)と考える見通しの妥当性が示唆されるのではないだろうか。

2. 2. 一般辞書と学習者向けの辞書類における意味記述について

まず、一般辞書であるが、『明鏡国語辞典 第二版』には、「沸く」の意味として、3つの語義が挙げられている。①水などの液体が加熱されて熱くなる。②液体が加熱されて湯になったり、お茶・コーヒーなどの飲み物ができたり、風呂が入浴できる状態になったりする。③感情が高ぶる。興奮する。また、「湧く(涌く)」の意味としては、5つの語義が挙げられている。①水などの液体が地中から出てくる。湧出する。②体から涙・汗などが出てくる。③虫など(特に、害虫)が発生する。④ある感情や考えが生じる。⑤ある物事が盛んに起こる。また、ある現象が生じる。一般辞書としての性質上、語義間の相互関係が明示されていない。例えば、「沸く」の語義①②は温度上昇とまとめることができるが、③の語義との関係が明らかではない。また、「湧く(涌く)」の語義①②③④は出現の意味である

とまとめることができるが、⑤との関係も明示されない。

次に、学習者向けの辞書であるが、『日本語基本動詞用法辞典』では、「わく」の意味として、5つの語義が挙げられている。①水が熱せられて熱くなる、または、煮え立つ。②人々が何かに熱狂する。③液体が流れ出たり、噴き出したりする。④虫や雲などが発生する。⑤ある感情が心の中に生じる。①が温度上昇、③④⑤が出現とまとめることができる。しかし、①と③④⑤の関係、また①③④⑤と②の関係が明示されていない。

語義間の関係がわからなければ、学習者にとっては、「わく」の全体像がつかめないため、動詞「わく」学習の困難さを増す。また、『日本語基本動詞用法辞典』には、コロケーションがわずかに示されているが、学生が「わく」を含む文を産出する際には、記述がやや不十分と考えられる。

3. 多義語分析の課題と分析に用いる概念

本節では、多義語分析の課題を確認し、比喻の概念であるメタファー、メトニミー、シネクドキーの定義を示す。

3. 1. 多義語分析の課題

初山（2020：131）では、多義語分析の課題として、少なくとも次の4つが考えられるとしている。①何らかの程度の自立性を有する複数の意味の認定、②プロトタイプの意味の認定、③複数の意味の相互関係の明示、④複数の意味すべてを統括するモデル・枠組みの解明。本稿では、①と③の記述を行う。

3. 2. 比喻の概念の定義

初山（2002：65, 69, 76）では、ある語が従来の意味から新しい意味に転用されるとき、その従来の意味と新しい意味との関係としては大きく3つのものに区別できるとし、次のように定義している。

メタファー：二つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、一方の

事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩。

メトニミー：二つの事物の外界における隣接性、さらに広く二つの事物・概念の思考内・概念上の関連性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩。

シネクドキー：より一般的な意味を持つ形式を用いて、より特殊な意味を表す、あるいは逆に、より特殊な意味を持つ形式を用いて、より一般的な意味を表すという比喩。

本稿では、「わく」を多義語として分析するが、分析する際に、比喩の概念であるメタファー、メトニミーを用いる。メタファー、メトニミーについては上記の定義に従う。

3. 3. メタファー、メトニミーの例

初山（2002：69）はメタファーについて「〔比較する〕（特に、共通点・類似点を見出す）という認知能力を基盤としている」とし、「外見の類似性に基づくもの」と、「抽象的な類似性に基づくもの」に分類している。本分析で用いたのは、外見の類似性に基づくメタファーで、その例として、初山(2002:65-66)では、「正月休みに食べすぎて、ブタになってしまった。」(例文5)という例文を挙げており、「ブタの太っている（と一般的に思われている）体型と5の文を発した人の体型の類似性に基づき、ブタという語を〈太った人間〉を表すのにも使っている」と述べている。

またメトニミーについては、初山（2002：76-79）では、「参照点能力」が認知的基盤であるとし、隣接性（注4）と関連性（注5）の観点から説明している。

本分析では二つの出来事が時間的に連続して生じることに基づくメトニミーを分析に用いた。その例として、「お手洗い」という語が挙げられており、「お手洗い」が〈用便(するところ)〉という意味を表すと述べている。

4. 分析

本節では、「わく」を15の別義に分け、考察を行う。まず、分析結果であるそれぞれの別義を示し、例文を挙げ、説明していく。

別義1：〈液体の温度が上昇して沸騰する〉

1. 十四郎は鉄瓶の湯が沸いたところで、寿司を野江の前に置き、長屋を出た。(注6)
2. (前略)暖炉には真っ赤な火がおこり、やかんには湯が沸いてピーピーと音をたて、部屋じゅうにかんばしいトーストの匂いがたちこめている。
3. 鍋にスープを入れて火にかけ、沸いたら酒、塩、水溶き片栗粉を順に加え、火を止める直前にみつばを加えて混ぜ、ごま油をたらす。

別義1は液体の温度が上昇し、沸騰することである。液体は主に、無味の水である。実際に温度が上昇するのは、水であるが、水が沸騰した結果である湯が主格に来る。また、例文3.のようにスープなど、味のついた液体が沸騰することを表す場合もある。

本稿では、別義1を基本義(注7)としたが、別義3が基本義である可能性もある。また、派生の起点を別義1からとしたが、別義3が起点である可能性も否定できない。初山(2020)では、多義語のなりたち(注8)として、「一部の意味の廃用化」があるとしており、「わく」もこのような歴史をたどったのではないかと推察されるが、現代語の分析だけでは、説明が難しい。本稿は、別義1が基本義であり、派生の起点であるとの立場をとり、論を進めていく。

別義2：〈液体の温度が上昇して入浴するのに適温になる〉

4. 帰ると風呂が沸いていた。女房には先に寝るように言い、風呂に入った。
5. 弘や高木や父母たちは、去年つくったドラム缶の風呂をわかす仕事をしていた。もうだいぶ前に風呂はわいているのだ。

6. 夫は、不自由な妻が自ら風呂に入りやすいように、台所のガラス戸の向こうにある風呂場を改良して、一日中沸いている最新式の湯舟に替えたのに、彼女はそこに至る不自由さを訴えて、いまだに夫の冷たさをあげつらっていた。

別義2は液体の温度上昇を表すが、沸騰には至らない。温度上昇した液体は入浴のみに用いられ、飲用としては用いられない。別義2は別義1からの拡張である。液体の温度上昇は、沸騰するという出来事と連続して生じる。別義1と別義2は二つの出来事が時間的に連続して生じることに基づくメトニミーの関係であると言える。

別義3：〈液体が地中から出現する〉

7. 県西部の山間部を主にまわりましたが、山の中で水の湧くところは、思ったより限られているなあと感じました。
8. 石油って、温泉みたいに地球の中心から湧いて来るんじゃないのかい？
9. 中南米やアフリカでは、温泉が湧いてても利用しないところが多いそうではありますが、われわれが旅に出れば、「どうせ泊るなら、足イ伸ばしても温泉場がいいね。どこか鄙びたところない？」なんてことになるのであります。
10. 400年余もこんこんと湧く井戸である。

別義3は、水、石油など、液体が地中から出現することであるが、液体の温度はさまざまである。主格には出現する液体が来るが、温泉、井戸など、出現する場所が主格になる場合もある。別義3と別義1には類似性の関連が認められるため、別義3は別義1からの拡張ではないかと考える。水の温度が上昇し、沸騰する過程を考えてみる。水を鍋に入れ、火を点け、加熱すると、無数の小さい泡が現れ、さらに加熱するとより大きな泡がなべ底から次々と上がり、さらに大きい泡がほこほこ現れ、水面が盛り上がるようになる。私たちはこのような現象を日常生活において経験している。この様子が、山中の湧水や石油の形状に似ていることから、派生した

のではないだろうか。別義3は類似性メタファーにより別義1から拡張したのではないかと本稿では考えるが、別義3から別義1へ拡張した可能性も否定できない。

別義4：〈体液が人間の体内から出現する〉

11. 「梅干し」と聞いただけで、酸っぱさが口に広がって、つばがわいてきそうですが、最近では市販の梅干しが、昔ほど長持ちしなくなってきているのにお気づきですか。
12. おにいちゃんのかおは まっかっか。おでこに あせもわいている。
(スペースは原文のまま)
13. 赤ちゃんが欲しがれば何回でも何回でもおっぱいを吸わせることです。「吸えば吸うほどわいてくる」のがおっぱいです。

別義4は、液体が出現するが、それは、つば、汗、母乳のような体液である。また、出現の起点は、地中ではなく人間の体内である。しかし、液体がある場所から出現するという点は別義3と共通している。別義4は別義3から類似性に基づくメタファーにより拡張したと考えられる。

別義5：〈味覚が出現する〉

14. 山村さんは、ふたりがタケノコの皮をなめるのを見ているうちに、自然に口の中にわいてきたあまずっぱさに、母のことを思いだしていた。
15. 秋のつばなは、しるしばかりの味がしたが、野葡萄やサセツポの実は、濃い酸味を舌の上に浮かしていると、のどの奥がちりっとするような甘味が湧いてくる。
16. 轡田はビデオカメラを構えた。あの、現金強奪後の逃走経路確認のために使うと言っていたビデオカメラ。いま、本当の使い道が分かった。綾乃の口に苦いものが湧いた。

別義5は、出現するものが、あまずっぱさ、甘み、苦いものである。また、出現する場所は、地中ではなく人間の口の中である。液体のような具

別義4ではないが、何かが人の体の一部である口から出現するという点は別義4と共通している。別義5は別義4から類似性に基づくメタファーにより拡張したと考えられる。

別義6：〈思考や着想が出現する〉

17. 情報は盗られても、アイデアは次から次へとわいてくるのだから、名刺代わりに自分のアイデアをあげようとする。
18. モラルの低いお客様に、そういう考えがムクムクと湧いてくるのも人として当然だと思います。
19. その女性アナウンサーは、筆者が若い頃ひどく印象に残った人と似ていたので、多少ロマンチックな気分になりながら入社したが、昼休みに待てよ、と雲のごとく発想がわいてきた。

別義6は、アイデア、考え、発想など、思考や着想が、脳内に出現するのである。具体物ではないが、何かが人間の体から出現するという点は別義4と共通している。別義6は別義4から類似性に基づくメタファーにより拡張したと考えられる。

別義7：〈感情が出現する〉

20. スポットライトを浴びながら、気持ち良さそうに歌っている夫の姿に、私はいろいろな感情が湧き、涙がこぼれてきました。
21. 彼女と孫治を眼の前に見ると、私にははじめて異母兄弟がいるという実感が湧いてきた。それは奇妙な、バツの悪さを伴う不快感であった。
22. そういう裏事情を知っていると、読むときも苦労が垣間見えて、逆に親近感が湧く。

別義7は、実感、親近感などの感情が心の中に出現することである。具体物ではないが、何かが人間の体から出現するという点は別義4と共通していることから、別義7は別義4から類似性に基づくメタファーにより拡張したと考えられる。

別義8：〈欲望が出現する〉

23. 不思議なほどに食欲が湧いてきて、風邪が治る。
24. さらに、遊ぶことでリフレッシュできて、次の仕事への意欲が湧きます。
25. 定信の胸の中に、そのころからすこしずつ、「この清潔な政治を、国政レベルで実現したい」という政治的野望が湧いてきた。

別義8は、食欲、意欲、野望など、欲望が心の中に出現することである。具体物ではないが、何かが人間の体から出現するという点は別義4と共通している。別義8は別義4から類似性に基づくメタファーにより拡張したと考えられる。

別義9：〈力が出現する〉

26. 小学生は純粹で、周りからの声援で力がわいてくる。試合を通じて伸びてくる子もいて、成長する可能性を秘めている。
27. アレックス・コックスの映画を見ると、私は元気になる。なぜそうなるのか、きちんと分析したことはないのだけれど、見終わったあとにふしぎなエネルギーが湧いてくる。
28. 声の調子もいいんですね、健康だと。だからまた、借金を返そうという気力がわいてくるんです。

別義9は、気力やエネルギーなど、力が心の中に出現することである。具体物ではないが、何かが人間の体から出現するという点は別義4と共通している。別義9は別義4から類似性に基づくメタファーにより拡張したと考えられる。

別義10：〈目視で気体に見えるものが空中から出現する〉

29. 薄桃色の雲が下から湧いて来た。
30. 姉川の川面に濃い霧がわいている。盛夏の早朝は、かならず川面に霧がかかる。
31. 「分からん、普通の爆弾で、あれ程空高くまで煙が上がるのは見た

ことがないし、爆発音の音質も、これまでのものとは異なっている。
煙が湧き上がる瞬間は、本庁舎の陰になって、気付かなかったが、
あの煙も初めての経験だ」

別義10は雲や霧や煙などが空中から出現するという意味である。雲や霧は気体ではなく、液体であるが、目で見た限りでは、気体のように見える。別義3では出現するのは液体、出現する場所は地中であった。しかし、目でとらえられる何かが出現するという意味は共有している。別義10は類似性に基づくメタファーにより別義3から拡張したと考えられる。

別義11：〈音が出現する〉

32. 伯母は、里の方に重病人があって、昨日から帰っているので、その留守中、食事などこの婆さんにたのんでいるのである。「ふふっ、鬼がいないと笑いが湧くと見えるね」「祐助さん、あんまり鬼々云うなよ。悪いよ」
33. 車が門をくぐって止まると、近くで川音が湧いていた。湯けむりに向こう岸の家の灯が見え隠れした。
34. 深夜うつらうつらしていると、イヌの方角に轟音が起こり、ひとしきり銃声が湧いた。おかしい。今夜はどの地点にも夜襲があるとは聞いていない。

別義11は音声が出現する。何かが出現するという意味は別義3と共有している。別義11は類似性に基づくメタファーにより別義3から拡張したと考えられる。

別義12：〈金銭的な価値を持つものが出現する〉

35. ちょっと余計なことを申し上げますけれども、もちろん社会福祉というふうに言っても、お金が自然にわくわけじゃないんです。
36. 何か良いことの前兆ならいいのですがそういう分けでもなさそうだし、同じ湧くなら金銀財宝だったら良かったんだけどなあ～
37. ある銀行家が言うのに、「百円でも千円でも自然と湧いてくるわけ

でもないので、それだけのおカネを得るには、それ相当の努力が伴わねばならない。

別義12では出現するものは、お金や金銀財宝など、金銭的価値を持つものである。何かが出現するという意味は別義3と共有している。別義12は類似性に基づくメタファーにより別義3から拡張したと考えられる。

別義13：〈虫が発生する〉

38. アパートを離れるとき電気代がもったいないと思い、冷蔵庫のコンセントを抜いていったんですが、帰ってきたら大量の虫がわいていました。
39. 熱帯のため肉はその日のうちに処分せねば、翌日には青味がかり、つぎの日には一面にウジがわいて、腐敗がはじまるのだ。
40. 日々の戦いで中隊は消耗し続けている。各分隊平均で一日あたり約二名。一人は負傷か戦死。もうひとりとは凍傷または疾病。不潔にしていれば、冬でも服に蚤が湧く。

別義13は虫など小さい生物が冷蔵庫や肉、服などに出現することである。さらに進んで繁殖する場合もある。これは、水が沸騰する際に、泡が生じる様と小さい虫が現れる様が似ていることから、派生した意味だと考えられる。主格の虫は、人に被害を及ぼしたり、気味の悪い思いをさせたりする害虫であり、虫を貴重なものや探し求めている場合などには用いられない。別義13は類似性に基づくメタファーにより別義3から拡張したと考えられる。

別義14：〈都合の悪いものが多数出現する〉

41. やぶかげからわいてでた数人の小男にとりかこまれ、おそろしい権幕で罵声をあびせられたのです。
42. 朝夕のラッシュアワー時に、池袋駅や新宿駅のホームで、つぎつぎとひきもきらず階段下から「湧いて」くる無表情な黒の大集団をみつめるとき、いいしれぬ恐怖感やめまいに似た感覚を味わぬもの

があるうか。

43. ヤモリ自体は嫌いじゃ無いのですが流石に夢でも無数のヤモリが湧て（原文のまま）出るのは気分が良いものではないですね。

別義14は、数人の小男、無表情な人々など、人間ではあるがそれをマイナスイメージでとらえており、それが多数出現するのである。また、人以外にもヤモリなど都合の悪いものや気味の悪いものなどマイナスの価値を持つものが多数出現するという意味で用いられる。別義13で出現するのは、害虫であったが、別義14は害虫のように都合の悪いものが多数出現する。別義14は類似性に基づくメタファーにより別義13から拡張したと考えられる。

別義15：〈人々が興奮・熱狂する〉

44. 確かに、右中間のあたりでも全速力でサードカバーに走るプレイなんかで、お客さんがワーツと沸いたりすると最高の喜びを感じますね。
45. いかにもなアメリカンジョークに、外国人出席者がドツと沸く。
46. 余興の子ども対力士の取組では、曙親方が四歳の少年に押し出して敗れ、会場は沸いた。
47. アドリブで笑いを取ろうと、はやり歌をつないで鼻歌にした。「おい船方さん、お月さん今晚は、有楽町で、俺は待ってるぜー」。客席がどつとわいた。3分間ほどの出番だった。
48. 北海道勢初の快挙に、ぎっしり埋まった三塁側アルプススタンドも沸きに沸いた。

別義15は、人々が興奮・熱狂する状態が出現することである。例文44、45のように興奮、熱狂する主体が主格に来る場合、例文46、47のように場所が主格に来る場合がある。また、興奮、熱狂のはなはだしさを表すのに、例文48のように「わきにわく」という表現も用いられる。水が沸騰する場合を考えると、ひっきりなしに泡がぼこぼこ音を立てて鍋の下の方から上がってくる。その様子与人々が興奮、熱狂する様が似ていること、

また、興奮、熱狂すると、体温の上昇が起きることから派生したと考えられる。別義15は別義3から類似性に基づくメタファーにより、拡張した意味だと考えられる。

5. 「わく」の多義構造

図を用いて多義構造を示す。

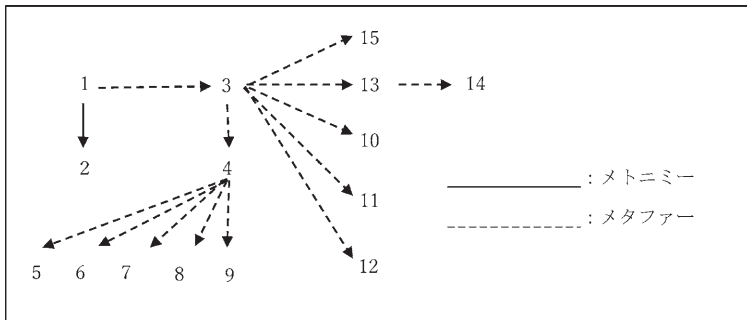


図1

6. コロケーション

別義1：〈液体の温度が上昇して沸騰する〉

〈液体〉がわく：(お)湯、鉄瓶の湯、電気コンロのお湯、熱湯、薬罐のお湯、コーヒー、スープ、鶏ガラスープ、ツユ、牛乳と生クリーム、出し汁、島酒

〈様態〉わく：グラグラと、チンチンと、ちゃんと、シュンシュン、ブツブツ、ボコボコと、コトコトと

主格に来る名詞は、水など無味のものが多いが、スープなど味のついた液体も用いられる。

別義2：〈液体の温度が上昇して入浴するのに適温になる〉

〈浴槽内の液体〉がわく：(お)風呂、湯舟

〈様態〉わく：ちょうど、一日中

〈形容詞連用形〉わく：早く

別義3：〈液体が地中から出現する〉

〈液体〉がわく：水、清水、伏流水、湧き水、ミネラルウォーター、石油

〈液体（温泉）〉がわく：温泉、湯、いで湯、強酸性の湯、熱い湯、源泉
〈様態〉わく：こんこんと、細々と、大量に、あちこちに、方々に、無限に、
どどどと、噴水のように、温泉みたいに、毎分

〈起点〉からわく：建物の真下、地下深く、地中、中庭

〈着点〉にわく：思っても見ないところ、あちこち、いたるところ、中洲、
蔵の裏、方々、街道沿い、湖畔、（地名）の近く、景勝
の地、川沿い

〈着点〉でわく：（地名）の近く

主格に来る名詞に修飾成分が前接する場合が多い。水が用例に多いが、石油などの例もみられる。

別義4：〈体液が人間の体内から出現する〉

〈体液〉がわく：唾、唾一滴、涙、汗、おっぱい、甘酸っぱい液、脳ミ
ソ

〈様態〉わく：ただひたすらに、わっと、じわっと、どこともなく、吸
えば吸うほど、とんと（～ない）

〈起点〉からわく：頭のどこか

〈着点〉にわく：掌の中、胸

別義5：〈味覚が出現する〉

〈味覚〉がわく：あまずっぱさ、甘味、苦味、苦いもの

〈様態〉わく：自然に

〈着点〉にわく：口、口の中、胸

別義6：〈思考や着想が出現する〉

〈思考・着想〉がわく：アイデア、イメージ、インスピレーション、ひらめき、発想、着想、考え、真の思想、メロディー、心地好いリズム・テンポ、智恵、意見やコメント

〈様態〉わく：次から次へと、どんどん、フツフツと、きちんと、自然に、おのずと、ぼんやりと、雲のごとく、ムクムクと、ふと、突然、急に、全然(～ない)、まだ(～ない)、いまいち(～ない)、どうも(～ない)

〈着点〉にわく：頭の中

別義7：〈感情が出現する〉

〈感情〉がわく：感情、感動、いとおしさ、おそれ、うれしさ、なやみ、懐しさ、喜び、むなしさ、悔しさ、怒り、悲しみ、楽しい気分、楽しさ、楽しみ、決意、親しみ、気もち、不安、もどかしさ、あせり、不審、思い、いたずら心、恋心、愛情、愛着、情熱、愛、愛しさ、情、嫉妬、憎しみ、憎悪、嫌悪、不満、不平不満、根性、殺意、やる気、情熱、感慨、感興、興味、疑問、疑惑、希望、口実、クソ度胸、好感、感謝の念、敬意、信頼、感傷、期待、苦笑、恐怖、決意、後ろめたさ、後悔、後悔の念、共感、雑念、自信、実感、情け心、情緒、想念、想像、快感、関心、概念、確信、空想、煩惱、自覚、滑稽な感、危惧の念、気分、苦悶、寂しさ、悩ましさ、弱気、口惜しさ、詩情、反発、意識、仲間意識、深い宿命的な痛み、助平根性、心持、妥協の心、同情、共感、反感の意識、妄想、親密さ、親密度、忸怩たる念、不気味さ、生き甲斐、自負、望み、優しさ、抵抗、畏敬の念

〈感情〉感がわく：違和、一体、罪悪、緊張、現実、幸福、安心、親近、

隔絶、責任、優越、不信、悲哀、空虚、連帯、新鮮、
安堵、達成

〈感情〉心がわく：競争、警戒、好奇、猜疑、羞恥、闘争、反抗、嫉妬
〈様態〉わく：自然に、うねりのごとくに、しらないうちに、急に、ふ
つつつ（と）、むらむら（と）、無性に、本当に、どん
ん、自然に、自然と、ムクムク（と）、ふいに、こんこん
と、とめどもなく、とめどなくちぎれては、ゆっくりゆっ
くり、不思議と、不思議に、すっかり、とつても、メラ
メラと、いやがうえにも、ますます、いろいろと、がぜん、
次々に、途端に、ほこほこ、なぜか、なんとなく、なにか、
なんか、なにやら、なんだか、少しずつ、ちょっと、突然、
ひたひたと、にわかには、グングンと、油然と、たちまち、
だんだんと、いきなり、じわりと、じわじわと、ようや
く、やっと、しみじみ、どこからともなく、ちよくちよ
く、つい、ぐっと、ときには、すごく、わっと、切々と、
ふと、ふっと、すっかり、当然、そのうち、次第に、漠
然と、やや、心細いながらも、互いに、逆に、どうも（～
ない）、これっぽちも（～ない）、なんら（～ない）、ふし
ぎなことに（～ない）、なぜか（～ない）、一切（～ない）、
決して（～ない）、いまひとつ（～ない）、どうしても（～
ない）、少しも（～ない）、何も（～ない）、あまり（～な
い）、あんまり（～ない）、たいして（～ない）、なかなか（～
ない）、まったく（～ない）、いっこうに（～ない）、どう
にも（～ない）、なんの（名詞）も（～ない）

〈起点〉からわく：腹の中、胸の底、心の底、内、内部、深いところ、
体の奥

〈起点〉わく：どこからか

〈着点〉にわく：胸、皆の胸、頭、頭の中、心、心の中、(人名)、(人名)
の中、

〈形容詞連用形〉わく：強く

主格に来る名詞にはさまざまな感情を表す語が用いられる。また、主格名詞の前に修飾成分が前節することも多い。用例が一番多く見られた。

別義8：〈欲望が出現する〉

〈欲望・欲求〉がわく：食欲、性欲、色情、欲情、意欲、欲求、欲望、野望、
排泄要求、弾きたい気持ち、逃げ出したい気持ち

〈欲望の対象〉意欲がわく：学習、購買、回答、生産、入札、労働、制作

〈欲望の対象〉欲がわく：取材、恋愛、知識

〈様態〉わく：自然に、ムクムクと、じわじわと、まったく（～ない）、
ぜんぜん（～ない）、まるで（～ない）、なかなか（～ない）、
ちっとも（～ない）、いまいち（～ない）、さほど（～ない）

主格に来る名詞の用例で、特筆すべきは、「欲」「意欲」に名詞が前接した複合名詞が多くみられることである。また、「（動詞ます形）+たい気持ち」の「ます形」の部分には自由に動詞を入れられるので、造語力が強いと言える。

別義9：〈力が出現する〉

〈力〉がわく：力、女性パワー、気力、回復力、集中力、活力、元気、
エネルギー、ガッツ、精力、闘志、やる気、勇氣

〈様態〉わく：ふしぎに、急に、自然と、ゲンゲンと、おのずから、な
ぜか、なんとなく、やっと、本当に、どーんと、とても、
もりもりと、がぜん、ふつふつと、何となく

〈起点〉からわく：おなかの底から

〈着点〉にわく：高原に

別義10：〈目視で気体に見えるものが空中から出現する〉

〈気体とみなせるもの〉がわく：雲、入道雲、積乱雲、霧、けむり

〈様態〉わく：もくもく（と）、むくむく、もわもわと

〈方角等〉からわく：ベイブリッジ方面から、下、夜の底
〈着点〉にわく：空いっぱい、川面

別義11：〈音が出現する〉

〈声・音〉がわく：声、悲鳴、せせらぎの音、こだま
〈～声／～音〉がわく：軽い嘆声、笑い声、掛け声、歓声、銃声、川音、
水音
〈ある種の声〉がわく：どよめき
〈～の声〉にわく：歓喜の声、「万歳！」の声
〈音声の発信元〉から：乗客たち、参加者、観客席
〈様態〉わく：ふと、にぎにぎしく、どっと、自然と、ひとしきり

別義12：〈金銭的な価値を持つものが出現する〉

〈金銭〉がわく：お金、金、金銀財宝、百円、千円
〈様態〉わく：自然に（～わけではない）
「お金が自然にわくわけじゃないんです。」のように、主に否定の
表現を伴って用いられる。

別義13：〈虫が発生する〉

〈虫〉がわく：虫、コクゾウ虫、南京虫、団子虫、げじげじなんかの虫、
地虫の集団、ウジ、蚤、しらみ、ショウジョウバエ、ボ
ウフラ、カメムシ、羽根あり、寄生虫、トリパノソーマ、
微生物
〈様態〉わく：いつの間にか、一面に、大量に、自然に
〈起点〉からわく：タワシ、筐のところ
〈着点〉にわく：床下、壁、体の中、頭の中、お腹、口、服、溝、魚の頭、
腋毛に付着した垢

別義14：〈都合の悪いものが多数出現する〉

〈人〉がわく：人、変な人、おおぜいの人間、人影、数人の小男、無表情な黒の大集団（駅の乗降客、語釈は筆者による）、満鞆子騎兵、有象無象、楚の騎兵たち、マスゴミ、トンペン（東方神起というグループのファン、語釈は筆者による）、知識もない人間、敵、同調者や協力者、馬鹿共、オネエの医者、グロテスクな獣、死魚の群れ、赤シカの群れ、無数のヤモリ

〈様態〉わく：急に、ふわっと、つぎつぎとひきもきらず、わんさと、いくらでも、大量に、消しても消しても後から

〈起点〉からわく：階段下、地、海の底

〈起点〉わく：どこからか

別義15：〈人々が興奮・熱狂する〉

〈人〉がわく：まわりのヤジ馬たち、お客さん、イングランドの民衆、観客、外国人出席者、二階の客、サポーター

〈人の集合〉がわく：世論、産業界、日テレ

〈人が作り出した状態〉がわく：日本経済

〈人がいる場所〉がわく：スタンド、会場、客席、店内、全校、刑事室、委員会室、日本全国、日本列島、議場、沿海諸省、場

〈「人がいる場所」中（じゅう）〉がわく：教室中、学校中、日本中

〈人の作り出す状況・状態〉がわく：熱気、歓喜

〈人の作り出す状況・状態〉でわく：歓呼

〈様態〉わく：ドット、ワーッと、うんと、大いに、密かに、「オー」と、一斉に、久しぶりに、一気に

〈原因〉にわく：喜び、大量出来高、話、復興景気、特需景気、復興需要、軍需景気、好景気、朝鮮特需、華麗なステップ、本人の解説、メダルラッシュ、華麗な得点、知事からのメッセージ、戦勝気分、戦勝、戦勝ムード、金メダルラッ

シュ、「新三種の神器」特需、「日本列島改造論」、「北
島景気」、東の間の喜び、追加点、ソフト躍進

〈原因〉でわく：良い話題、嬉しさ、デジタル時代、松本質問、日韓の
健闘

〈できごと〉にわく：根津権現祭、事件、情報、大統領選挙戦、初の決
勝対決、祭典、ゴールドラッシュ、バブル景気、
マイカーブーム、ベビーラッシュ、メーカー対決、
ワールドカップの日韓共催、一番祭り、i モード
ブーム、バイオブーム、ボジョレーヌーボー解禁

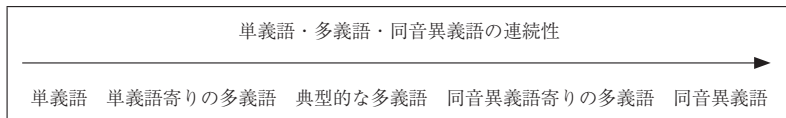
〈できごと〉でわく：朝青龍の快進撃

7. おわりに

本稿では「わく」の意味分析を試みた。「わく」は現行の辞書では、1語の多義語であるというものと、2語の同音異義語であるというものが存在し、学習者から見ると、基本的な動詞であるにもかかわらず、全体像が捉えにくいものだった。そこで、本稿では、コーパスで用例を収集し、複数の別義を記述した上で、分析結果に基づき、その語義間の関係を示した。さらに、各語義のコロケーションを記述し、学習者の適切な使用につながるようにした。分析においては、比喩の概念を用いて分析し、多義語分析の課題とされる4つのうちの二つ、「何らかの程度の自立性を有する複数の意味の認定」、「複数の意味の相互関係の明示」を行った。その結果、「わく」は温度上昇による沸騰という意味と出現の意味が際立っており、そこからそれぞれ派生した意味が認められる。また、意味の派生はメタファーとメトニミーという比喩によって動機づけられていることを示した。本稿では、「わく」が多義語であるか、2語の同音異義語であるかについては、「同音異義語寄りの多義語」との立場をとり、別義1を派生の起点としたが、別義3からの派生の可能性も否定できない。派生の順序に関しては、通時的な研究が必要であり、今後の課題としたい。

注

- 1 本稿の分析対象である「わく」は「沸く」、「湧く」、「涌く」の3つの漢字表記に加え、平仮名表記もなされるが、表記の違いによる区別はせず、分析を行う。表記の相違による意味の違いが語の意味の違いに対応するものではないことは、初山（1994）で、明らかにされている。初山（1994）は、複数の漢字表記が存在する形容詞「カタイ」を分析し、漢字表記の違いが語の意味の違いに対応するものではないと結論付けている。本稿でもこれに倣い、漢字表記が、語の意味の違いに対応するものではないとの立場をとる。
- 2 多義語について国広（1982：97）は次のように定義しており、本稿でもこれに従う。「多義語」（polysemic word）とは、同一の音形に、意味的に何らかの関連を持つふたつ以上の意味が結びついている語を言う。
- 3 初山（2020：130）では、多義語の多様性について、「単義語と同音異義語を両極とし、その間に多様な多義語（単義語寄りの多義語、典型的な多義語、同音異義語寄りの多義語）が連続的に存在すると考えられ」とし、それを以下のように図示している。



また、初山（2020：146）では、「複数の意味の関連性が弱い語」のことを「同音異義語寄りの多義語」としている。

- 4 隣接性のメトニミーとして初山（2002：76-78）では、「空間内における隣接関係に基づくもの」、「二つの出来事が時間的に連続して生じることに基づくもの」、「二つの事柄が同時に生じるもの」を挙げ、「今日は鍋にしよう」という場合の「鍋」で鍋料理を表すこと、「お手洗い」という語で、時間的に先行する「用便」を表すこと、「人前で話す、つかたくなってしまいます」という場合の〈（肉体など）が物理的にカタイ〉ことと〈精神的に緊張した状態〉が同時に生じることにより、基本的には物理的なことを表す語で、精神の状態を表すこと、という例を示し説明している。
- 5 関連性のメトニミーとして初山（2002:78-80）では、「本来〈もの〉を表す語で、〈そのものに関わること〉を表すもの」、「〈ある人〉と〈その作品〉が密接な関係にあるということに基づき、本来、〈人〉を表す語で〈その人の作品〉を表すもの」に分類し、「Aさんは本当に酒が好きだ。」という場合には酒という物

体ではなく、「酒を飲むことが好きだ」ということを表すこと、また、「モーツァルトを聞く。」という場合には「モーツァルト」という語で〈モーツァルトの作品〉を表すこと、という例を示し説明している。

- 6 本稿の用例は、KOTONOHA「現代日本語書き言葉コーパスコーパス」で収集した。(http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/)
- 7 本稿ではプロトタイプの意味を基本義という語で表した。初山(2002:107)では、プロトタイプの意味を「複数の意味のなかで最も基本的なもののことであり、基本的であるということは、最も確立されていて、中立的なコンテキストで最も活性化されやすい(想起されやすい)といった特徴を有すること」と述べている。
- 8 初山(2002:149)では、同音異義語寄りの多義語の成り立ちとして、①一部の意味の廃用化、②外来語の意味、を挙げている。①について「ある語がある時期までに複数の意味を持つに至り、その後、現代に至るまでのどこかの段階で、複数の意味のうちの一部が使われなくなる、つまりは廃用化するということが考えられます」と述べている。

引用文献

- 北原保雄(編)(2010)『明鏡国語辞典 第二版』,大修館書店
- 国広哲弥(1982)『意味論の方法』,大修館書店
- 小泉保・船城道雄他(編)(2004)『日本語基本動詞用法辞典 初版』,大修館書店
- 小学館辞典編集部(編)(1999)『現代国語例解辞典 第二版』,小学館
- 小学館大辞泉編集部(編)(2012)『大辞泉 第二版』,小学館
- 西尾実・岩淵悦太郎他(編)(2019)『岩波 国語辞典 第8版』,岩波書店
- 松村明(編)(2019)『大辞林 第四版』,三省堂
- 初山洋介(1994)「形容詞『カタイ』の多義構造」『名古屋大学 日本語・日本文化論集』
2, pp.65-90 名古屋大学留学生センター
- 初山洋介(2002)『認知意味論のしくみ』町田健(編)(シリーズ・日本語のしくみ
を探る⑤),研究社
- 初山洋介(2020)『実例で学ぶ認知意味論』,研究社
- 山口明穂・和田利政他(編)(2013)『旺文社 国語辞典 第十一版』,旺文社
- 山田忠雄・柴田武他(編)(2017)『新明解国語辞典 第七版 特装青版』,三省堂

用例

KOTONOHA「現代日本語書き言葉均衡コーパス」

(<http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/>)